強者の戦略

第９回　南

～卒論と院試(１)～

こんにちは！地理の南です。今回は、基本的に学生なら経験するであろう卒業論文作成の話をしていきたいと思います。ただ、京都大学でも経済学部や法学部などは卒論を書かなくても卒業できるようになっています。超理不尽ですよね～。経済学部の人は３年生までに単位をそろえることができれば、４年生のときに１回も授業に出なくていいんですよ！この事実は受験生のみなさんにはあんまりインパクトがないかもしれませんが、卒論がないだけで経済学部を選ぶのもありなんじゃないかと個人的には思っています(笑)。

卒論の話の前に、３年生の終わりのときの話もしておきましょう。３年生から４年生という時期は就職活動時期にもあたっています。よく分からない組織からたくさんの企業の情報が掲載された分厚い冊子が届くのもこの時期です。大学３年間なんてあっという間ですよ。私は何のビジョンも描かないまま漫然と過ごしてきたので、周りが就活を始めていても何にも危機感を抱きませんでした。一応、大好きだった NHK にエントリーシートを送ることだけはして、失敗したら大学院に進もうと考えました。言っておきますけど、この考えは２つの意味で最低です。まず、NHK というところは、放送業界でも最大手なのです。しっかり就活をする気もないのに、エントリーシートの書き方も練習していないのに、就職できるほど容易な企業ではないということを知らなかったことが相当に恥ずかしい。また、大学院に進むことは、相当ハードな道を選んでいるはずなのに、消去法的に選択したことが凄まじく恥ずかしい。しかし、当時の私にはどうすることもできませんでした。放っておいても学年は進みます。学年上昇を止めることは不可能であり、就職しないのならば、大学院へ進むしか道は残されていません。そのまま卒業したらニートになってしまうわけですから。

年末あたりにエントリーシートを適当に仕上げたら、あとはこの時期特有の試験勉強にいそしみます。今回の試験勉強への熱の入れようは半端じゃなかったですよ。相当の単位をもぎ取らなければ卒業できなくなりますからね。語学の勉強はもとより、がっちりノートを書ききった日本古代中世政治文化論などの全学共通科目、文学部開講授業のレポート、教育学部開講授業の試験への対策など、相当ハードな毎日を送ります。さて、若干、ここで問題になるのは、多重登録していたので、試験時間がかぶってしまうことがあったことです。授業登録の時には、最後の試験が“何月何日何曜日何時から”なんて、決まっているはずもありません。いざ、試験期間になってかぶっていることに気づくのです。多重登録している自分が悪いと思いながら、１年間授業に出続けて、試験時間の兼ね合いで単位が取れないなんてかわいそう過ぎます。ですよね(笑)。なので、１回だけ試験時間中に移動したことがありました。全学共通科目の試験を、試験開始から 20 分ぐらいの速攻で仕上げて移動し、文学部の教室に行って、遅ればせながら試験を受けるということをしました。“全学共通の方の管理が厳しく、文学部がゆるい”ことを考えての移動順です。

でも、この試験対策や試験日の動きなんて、２月のことを思えば序の口でした。私は教職免許のために法学部の試験を受けなければならなかったのです。憲法・刑法総論・民法第一部あたりです。授業自体は面白かったのですが、１年間の勉強量は膨大です。しかも法学部の友人に聞くと、単位の認定は相当厳しそうでした。文学部生の自分にもその厳しさは発揮されると思ったので、浪人生のときのように必死で勉強しました。法学部生でもないのに『伊藤真 試験対策講座５ 憲法』『伊藤真 試験対策講座１ 民法総則』『刑法総論 前田雅英』(通称“マエマサ”)を購入し、朝から晩までずーっとこの３つの勉強です。文学部の試験やレポートは１月中に終わり、法学部の試験は２月に行われます。“ほんとだったら遊び倒している時期なのにな～”と思いながら、泣きながら勉強を続けました。そして、いざ試験です。私には使用の仕方が分からないのですが、何故か六法全

書持ち込み可…、しかも持っていなかったら貸してもらえました。私は持っていなかったので一応貸してもらいましたが、大して使いはしませんでした(笑)。憲法や民法のテストはどんなものか忘れましたが、刑法だけは覚えています。「生活苦にあえぐお母さんが娘と青酸カリ入りのオレンジジュースを飲んで無理心中を図ろうと考えていました。その無理心中を図る前に、お母さんは別のところへ行くために、隣の家の子を呼んできて娘の面倒をみさせました。この間に娘がのどが渇いたと訴えて、隣の家の子が気を利かせて、食器棚の上の方に置かれていた青酸カリ入りオレンジジュースを娘に飲ませ、娘が死亡することになりました。この母親にはどのような量刑がふさわしいと思うか。法学的観点から自由に論ぜよ」というお題です。試験時間は 90 分ですけど、読んだ瞬間から帰りたくなりましたね。１か月必死で勉強したって、ほぼ何も書けないですよ。まぁ一応、なんやかんや書いておきましたけどね。

試験から解放された３月、私にはまだやるべきことがありました。卒論のテーマ決めです。他の人がどういう風にしてテーマを決めているか正直疎い部分がありますねー。就職を希望している人は、重厚な卒論でなくていいと思うので、教授がテーマを決めてくれるところもあるかもしれません。大学院進学を考えている人は、２～３年生の間に教授とも強いパイプを作りながら研究を進めているはずなので、テーマはおのずと決まっていた時期なのでしょう。でも、私は“なんちゃって院志望”なわけですから、何にも決まってませんでした。現代史、特に日本に興味があったので、３月中は日本近現代史の書物を読み漁って、面白そうなテーマを見つける努力をしました。そのうち、石原完爾の『世界最終戦論』を読み直し、この当たりの内容で書こうかなーと思い始めるようになりました。

そして、ついに４月を迎え、最終学年４年生となりました。今回の成績表はまぁまぁでした。民法などいくつか落とした単位はありましたが、概ね狙った単位をゲットできたので満足いたしました。刑法も 60 点ぐらいで合格です(助かった～)。K 村教授の英書講読もゲット！！授業のコマ数的に余裕ができそうだったので、学芸員や図書館司書の免許も取ろうと、なぜか資格マニアな気持ちが湧き上がり、教育学部のいくつかの授業、民法の授業、そして卒論演習の授業に出ることになりました。４年生で必修の授業を多く受けるなんて、駄目大学生ですよ。っと、ようやく単位が追いついた慢心からうっとうしい発言をしてしまいました(笑)。

さて卒論演習の授業です。現代史学・現代日本論の卒論演習は年２回発表が割り当てられます。４～７月で１回、９～12 月で１回です。自分がどういう研究を行っているかの進捗状況説明という感じです。この説明を行った後に、N 教授・K 教授からアドバイスをもらいながら、参加している他の４年生も交えて意見交換が行われます。

１回目の発表がどういうものなのか教えておきましょう。恐らく、文系学部の発表の１回目は先行研究への言及だろうと思います。みなさん、誰も研究していないような新たな研究は４年生では求められていないのですよ。教授の度肝を抜いてやろう、そんなことは考えないでください。自分の研究したいテーマに関連した書物をまず読み漁り、研究の行き届いていない部分、もしくは研究に疑問符のついている部分を発見するのです。「○○さんの書物では A 的な面から考察されていますが、B 的な面での考察が不十分だと思います。私はこの B 的な面を、△△という手段で、□□の資料に当たりながら研究していきたいと思います」というぐらいが標準発表でしょう。すると、教授から、「○○さんの考え方はそうではない」「ほかの研究分野でもその点については考察されている。それも読みなさい」「その研究に詳しい教授を紹介してあげよう」などの有難い言葉が発せられ、次回の発表に向けての研究方向が定まるといった流れになります。私自身は研究テーマがあいまいだったので、早めに発表して意見をもらおうと

考えたので、４月ぐらいに発表させてもらったと思います。そしてついにテーマが、「日中戦争における佐藤外交」に決まりました。ちょっと長くなったので、次回も卒論の話をお送りします。